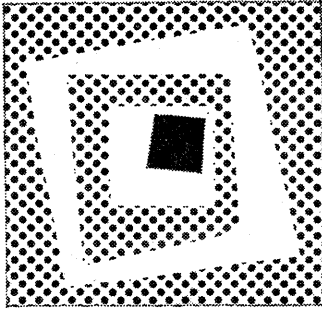


エリクソンと幼児教育 (最終回)



仁科 弥生

育てあう関係、相互性について

エリクソンは、幼児期の恐怖にその起源をもつと思われるいくつかの大人の不安について、次のような分析を試みている。

子どもは幼児期の初期に、しつけられる過程で、身体的機能のあれこれを邪悪なもの、恥ずべきもの、或は物騒なものと考えようになる。エリクソンはこの事実を重要視する。なぜなら、どの文化でもこの過程を利用して、子どもたちにその文化独自の様式の信仰や道徳意識、自尊心、自発性などの発達をうながすために、われわれの成就感覚には、必ずその幼児期のルーツについての疑惑がつきまとい、われわれを不安に陥れるからである。また、幼児期に、われわれは内面的、外面的善悪について痛い思いをしながら体験的に学ぶが、同時にそれを通して最初期の現実感覚をも学ぶ。そのために、自分の怒りの衝動や矮小感や分裂した内的世界から自分をおびやかすものも、まるで外界からおそってくる敵や圧力

であると思いがちになっている。そして、それが素地となって、われわれは、外からの、漠としてつかみどころのない巨大な力に侵略されるのではないかと不合理にもすぐに恐れるのである。また、心を許せない者ばかりに取り囲まれ、窒息するのではないかと心配し、或は嘲る聴衆の面前で徹底的に面目を失うのではないかとおののかのである。エリクソンは、これらが人間の不安を特徴づけるものであるととらえている。

また、自分にとって重要な意味をもつ行動を阻止されたり、或はその行為をなし遂げようとして許されなかった場合に経験するわれわれの不寛容性は、特定の器官様式が不毛化されることへの子どもの恐怖に対応すると考えられている。たとえば、口唇の段階では、食物が与えられず、空っぽのままに放置されるのではないかという恐怖、或は感覚的、官能的刺激に飢えるのではないかという恐怖がある。これらの恐怖が後になって交錯し、たとえば有り余るほどの食物に恵まれてはいるが、官能的親密さは満たされていないという大人の心に、刺激を求

め、飢えることを恐れる不安となってあらわれることがあるという。次の発達段階である筋肉の領域に関しては、二重の不寛容性に由来する不安が指摘されている。すなわち筋力が無力になるほど束縛され、或は押えつけられているという感覚から生じる不安と、逆に全く押えられていないという感覚や、外的限界や境界線を見いだせないという感覚などから生じる不安である。さらに、自分の自律を明確にするために必要な方向づけも失うのではないかという不安もあるという。そして、そのような筋肉的サディズムと肛門的サディズムが結びついて、背後からおそわれることへの不合理な恐怖をわれわれの心に引き起こすことになる」と説明されている。

移動・男根期の恐怖として、男の子が抱く去勢の恐怖の仮説はよく知られている。エリクソンによれば、その他に、移動不能にされることへの恐怖、閉じ込められることへの恐怖があり、同時に、導かれないのではないかと、また自分の自彊性を主張し、戦うために必要なはつきりした境界線を見いだせないのではないかという恐怖

もあるという。そして、ここに、男子が敵を必要とするという口実の幼児期における起源があるとみる彼の分析はきわめて興味ぶかい。つまり、具体的な敵の存在に対して自らを武装し、戦うことによって、男子は、知られざる敵が不意にあらわれて無防備の自分をおそうのではないかという執拗な不安から、実は救われていると彼は解釈しているのである。

女子の場合もまた、口唇期の満たされないままで放置されることへの恐怖や、肛門期の空っぽにされることへの恐怖が女性特有の不安につながるとされている。この点について、子どもの遊びの研究でエリックソンが空間の構造化に性差のあることを観察し、少年少女が身体感覚的に同じようには経験していないという事実を指摘したことはすでに触れた通りである。すなわち、女子が抱く自分の身体的イメージには大切な腹部が含まれているという。たしかに有機体として、人間として、或は社会的役割をもつ者としての女性の自己実現はこの腹部に依存している部分が多い。そこでエリックソンは、空っぽのま

まで放置されることへの恐怖や置き去りにされることへの恐怖は、女の生存全体にまで及ぶ基本的な女性特有の恐怖であろうと想定する。そして、このような恐怖から生じる不安が、女性をことさら男性の考え方に対して服従的にしたたり、或は逆に対抗意識をむき出しにして男性と競争させたり、また、男性をとりこにし、支配しようと女性をかりたてると分析している。そして置き去りにされることへの女性的恐怖から生じる結果について、彼はとくに次のことに注目している。私たちは周期的に競争や征服、戦争を遂行しようとする。このような男たちの所業が再三家庭を破壊し、息子たちの生命を奪うことになるにもかかわらず、女たちがそのような男の所業に疑問を抱かず、或は異議申し立てをしようとしなないのは、自分たちが捨てられ、顧みられなくなることをの無意識的に恐れているからであろうと分析する。したがって、まず女たちが見捨てられることへの自分の恐怖に気づくこと、また戦争のための戦争を繰返す男の愚かさに対して、自分たちがなぜ分別をもって疑問を起こそう

としないのかを女たちが理解することが重要であるという。つまり、男が起こす戦争は女が阻止しなければ、地球上から戦争はなくならないうというのである。このような見解に対しては異論も多いことと思う。なぜなら過去の歴史を振り返ってみるまでもなく、ことはそれほど単純なものではないからである。しかし、見方をかえれば、それは、男性優位のためにゆがめられてきた現代社会に対して女性が果たすべき重要な役割へのエリクソンの大きな期待の表明でもあると解することができるのではあるまいか。

以上のように、エリクソンは、人生が長い幼児期で始まり、他人への依存を余儀なくされるといふ事実が幼児期の被搾取性を助長するという人間生存の実態を指摘し、その中から子どもの怒りや恐怖が生まれ、さらにそれらから大人の不合理な不安が由来する様相を明らかにしたのである。そのような子どものもつとも初期の、しかももつとも意識されていない恐怖は主に身体的な構造と成長に基づく恐怖であるが、周囲の大人たちが示す予

測不可能な緊張と怒りに子どもが直面して経験する困惑にも関係して形成される。児童期の後半から思春期にかけては、このような恐怖は年上や年下の競争相手と関連して生じる。そして青年期に至り、社会的変動が引き起こす同一性喪失の恐怖が、幼児期の経験を通してわれわれの心の中でくすぶりつづけている不安を呼びますことになるといふのである。また、大人の偏見や誤った判断の中には、幼児期の不安に対する防衛メカニズムから生じたものもあると分析したのである。そしてこのように幼児期の恐怖が、一生の間、われわれにつきまとうこととなる事実を重くみて、彼はこれらの不安を乗りこえるための提言を次のようにしているのである。

まずわれわれは不安の起源にまで洞察を深めて、われわれの幼児の扱い方に関する無意識的な迷信や偏見から自らを解き放す努力をしなければならない。そして人間に関する搾取にとって、幼児期が重要な根拠を提供しているという事実をわれわれは理解する必要があるという。大人と子どもという不平等な関係は、男性と女性、

支配者と被支配者など、存在に関する一連の対立物の中で、その筆頭におかれる関係だからである。今日、これらの対立をめぐって、その一方の側の搾取からの解放が政治的にも心理的にも問題になっている。エリクソンは、両者の間には、思慮分別のある協力関係に基づく新しい形式が必要であると訴えている。その新しい協力関係とは、パートナーたちがそれぞれ相手の分業的機能を認め合うことであるという。それは「パートナーたちは、本質的に似通っているために対等であるのではなく、まさにその独自性のゆえに、彼らの共通の機能にとって互いに不可欠であることから、対等なのである。」（『幼児期と社会』）という彼の信念に由来する。また、先に触れた相互補完的であるという相互性の強調がその中心にあることも明らかである。

このような視点から、彼は、搾取とは果実を結ばぬ怒りに通じると考えている。つまり搾取は、それに関与するパートナーの一方が、自己の拡大のために、相手が獲得した同一性の感覚や統合を奪い取るというやり方で、

分業的機能を誤用することである。そのような搾取は相互性の喪失で特徴づけられるが、それは結局、共通の機能も破壊し、ひいては搾取者自身をも破壊させることになるからである。そこでエリクソンは、代わりに、互いに排他的な同一性に固執することをやめ、より普遍的な倫理を見いだすことを提唱する。そして黄金律をその一つの可能性としてあげている。これは心理学や精神分析学の枠を越えた主張であるが、一貫して個人と社会の問題を追求しつづけてきたエリクソンにとって、倫理の領域に踏みこまざるをえなくなったことは、当然の帰結であったと言えよう。彼自身、「心理学が貢献しうることといえ、不安に耐えることを教え、隠れた強制と搾取とを認識させることだけである」（『幼児期と社会』）とその限界に謙虚に、しかしはっきりと言及している。さらに、われわれには実験や議論の中で人間に関するデータを、まるで動物か、統計上の数字であるかのように扱いたい誘惑があることも指摘する。そしてアブローチ次第で人間はある点まではそのような存在にまで縮小され

うるといふ事実から、多くの素朴な権力意識が引出されるといふ。しかし、人間を人間自身の単純なモデルにまで縮小することによって、人間をさらに搾取されやすいものにする試みが、本質的に人間性をとらえた心理学にならうるはずはなく、それに代るものとして、われわれには人間の潜在的知性に慎重に訴えかけることしかない」と結論するのである。

さて、すでに考察したように、乳児の示す種々の反応がその親に向けられ、親がこれに答えるというような相互の刺激と反応の組み合わせの中で相互性が発達し、このようなもつとも初期の社会的経験が基本的信頼感と基本的不信感との一定の割合を乳児に体得させる、とエリクソンは想定する。この親子関係における信頼と相互作用のもつ意味は、子どもがその両親を信頼するということだけではなく、両親もまた子どもを知り信頼して、子どもの愛情欲求に答え、新しい人や事物との出会いをほげまし、むつかしい運動課題の習得を勇気づけるといふことである。そして相互性は、倫理的行為を含めて、後の

すべての効果的な行動の基本的構成要因となると考えられている。さらに、この基本的信頼感と相互性の獲得の失敗が精神的発達の障害になるとして精神科医によって注目されているが、エリクソンは、人間の思想的、道徳的、倫理的素質は、この初期の幼児経験の相互性によって決まるといふ仮説を提出している。そして、その相互性の原理が黄金律の基盤であると考えているのである。

黄金律とは、何事でも人からして欲しいと思うことは人にもまたそのようにし、人にして欲しくないことは人にもするなというキリストの山上の垂訓の一つである（マタイ伝、七章十二節）それは国や時代をこえて、古くから人々に共通の基盤をもつ道徳律であり、また多くの思想家の格言の主題ともなってきた。エリクソンは『洞察と責任』の中で次のように述べている。「黄金律は明らかに、人間存在のもつとも根本的逆説性と関連がある。各個人は自己の身体をもち、自覚した個性、自己の世界像と生死観をもつ。しかも同時に、他人と同じに知覚し、判断している現実に参加し、事実として、他人と

不断の相互交渉を行なっている。……自分の関心と他人の関心を同一のものにするために黄金律は相互に警告する。『人にして欲しくないことは人にもするな。』そして一方では勧告する。『人にして欲しいと思ふことを人にもまたそのようにせよ。』心理的に訴えるために、自己中心的な思いを最小限にして、他人へは博愛的な同情心を最大限に与えようというのである。〔『洞察と責任』〕

この観点から、エリクソンは親子関係の相互影響過程を次のように言いかえている。子どもの世話をしている親は、子どもの活動性、同一性の感覚、倫理的行為の準備性を確保していくために、色々のことをしてやりながら、そうすることによって自分自身の活動性、同一性感、倫理的行為の準備性を確保しているのである。また、最初期の信頼を育む母子の相互性は出発点であり、その後、それは次第に複雑になっていくともいう。たとえば次の発達段階では、自律性を身につけようとする内部からの動きが子どもに起こる。エリクソンはこの時期の徳目として意志力をあげているが、子どものわがまま

な意地っ張りに出会って、大人はこれまで気づいていなかった自分の意志について学ばされることになるという。このように、成長過程にある子どもの発達していく徳目は、親や家族をはじめとして学校や地域や社会など、子どもをとりまくさまざまな人々の徳目と相互にがっちり組み合わせられていると想定されている。

そして黄金律について、特に次の点が強調されている。「この中において、各人は、本当に価値のあるものは、行為をする当事者と相手との間の相互性——他人を強化しているにもかかわらず、自身をも強化するという相互性——を一層拡大していくという経験をうる。このように行為の当事者と相手とは一つの活動におけるパートナーなのである。人間発達の光に照らしてみると、行為の当事者は自分の年齢、発達段階、条件に見合う徳目を、他人の中に生み出そうとしている時でさえ、自分の年齢、発達段階、条件に見合う徳目を自分の中にも生み出すということになる。このように考えると、黄金律は次のようになるであろう。「他人を強化する時でさえ、

自分を強化するものを他人にすることが一番である。つまり自分自身をのばすものであれば、他人の最良の可能性をのばすであろう。」(『洞察と責任』)

この関係は、親子関係以外の、たとえば男性と女性、教師と生徒、医者と患者というような、それぞれに役割の分化した関係の中にもあてはめてみることができると考えられている。

ちなみに、男女の機能の違いは次のようにとらえられている。

性の衝動と愛とを結びつける性器に関するフロイト理論の中心には、相手の力や可能性を引き出そうとしていながら、同時に自分自身の力や可能性が引き出されるという相互性の概念が示されているとエリクソンは指摘する。つまり、そこには、男性は女性をより女性たらしめる時により男性となり、その逆もまた正しいという考え方、また、お互いに異なったユニークな存在であることがお互いに自分のもつ独自性を高めることになるという考え方が示されているというのである。

エリクソン自身は、男女の差異を単に解剖学的なものとしてとらえているのではなく、二つの性の間には心理学的な差異があると考えている。そして黄金律を修正して、「二つの性は異性の独自性を拡大するものである。またお互いが本当にユニークであるためには、同等にユニークな相手との相互性を基盤としなければならないということになる。」(『洞察と責任』)と述べている。先に触れた、バートナーがお互いの独自性を強調することは、決して不平等性を強調することにはならないという彼の主張は実はここに由来することが明らかとなる。また、彼は、女性が男性と同じ仕事ができることによって男女平等を訴えるかぎり、それは本当の女性の解放にはつながらないのではないかという。むしろ仕事を女性自身に適應させることによって人間としての真の解放をめざすべきであるという。その意味ではすべての人間が解放されなければならないのはいうまでもない。したがって、女であろうと、男であろうと、またどのような能力の持ち主であろうと、誰もがもって生まれた、いわば運

命的なものすべてを自分の同一性として主体的にとらえ、自分に適した独自のなやり方で社会に参加していくことこそ大切であるという。そこには、統合的なヒューマニズムの問題として男女の問題をとらえようとする彼の姿勢がうかがわれる。同時に、すべての人間が自分に適したやり方で社会に参加することができるように社会環境をかえて行く努力をすることが今日の課題であることがわれわれに対して示唆されている。

では夫婦関係の相互性はどのようにとらえられているのであろうか。結婚生活における男女は普通、分業と協力の体制をとる。エリクソンによれば、男女の間で、コミュニケーションをすすめ、協力をはかる能力や人格的徳目においては差異は少ない。しかし、たとえば家庭という共同生活において必要な役割を引き受けたり、生殖において男女がそれぞれ異なった役を引き受けたりする領域では、その差異も著しいといえる。したがって、男女は、自我機能の領域では、もっとも性差が小さいので、この自我機能を働かせることによって性的な相互性

と両極性を統合しえなければならぬであろうと想定されている。

また、彼は愛は人間の徳目の中でとくに大切なものであるが、成人の愛は、異なった機能の中にある対立したものを永久におさえていくお互いの尽力であると定義している。夫婦生活においてはエリクソンのいうそのような愛が一層必要とされるであろう。エリクソンはまた、性生活を通して夫婦の間で「二人の人間の相互調整というものが最高度に経験されるときには、男性と女性の対立や、事実と幻想、愛と憎しみなどの対立から生じる敵意や怒りの烈しさがそがれる。……こうして性というものに以前ほどつきまとわれなくなり、過剰補償はそれほど必要でなくなり、サディスティックな支配が無用となる。」(『幼児期と社会』)と述べている。この考察は、心身の相互性がうまくいっている夫婦には国境をこえてそのままあてはまると思われる。

さらにエリクソンは、このように親子関係や男女関係について述べたことが、医者患者関係や国際関係にも適

用できると考えている。すなわち、医者の特門とその技術を通して、それぞれの仕方、患者は患者として、人間として治療をうけていきながら、同様に医者は実際の医学者として、人間として成長していくという。国際関係についていうならば、国家を、政治的、技術的、経済的成長過程のそれぞれ異なった段階にある統一体としてとらえ、国家間の不平等を無視するというのではなくて、むしろ歴史的な差異からくる独自性を尊重しようとして提案する。そして国際間の相互性を維持することを各国家の課題として共に考えようという。なぜなら「軍備拡張競争にとって代わるものはただ、未来の共同の同一性に向って、自分の国家を発展させる人々を強化しながら、これまで自分の国家を強めてきたものを、相手国家の中にもひきおこしていく努力しかないように思う。このような仕方でのみ、はげしく移りかわる技術的世界と歴史の中に、お互いに共通なものを見出すことができ、過去の遺産としての勝利と敗北、征服と搾取という危険なイメージを乗り越えることができるからである。」(『洞

察と責任』これは、けっして目新しい主張ではない。しかしエリクソンがここであえて強調したいのは、この相互性の理念をわれわれがお互いに納得しあうことの必要性であろう。その相互性に支えられた連帯の中で、お互いの独自性を尊重しつつ、共に生きる新しい可能性を止揚する努力をすることを、彼は静かに、しかし真摯に主張しているのである。

以上で、エリクソンの自我発達理論の考察は終る。この理論を反映させて、わが国の、とくに大学生の人格の発達の様相の観察と考察をまとめることがこれからの私の課題だと考えている。

||了||

※

※